

東アジアの歴史認識から相互理解と平和の担い手へ

国際平和をめぐる諸問題の専門家が結集した「オール立命館」で具体的な平和の提示を目指しています。

世界ではいまなお内戦や紛争、それに伴う深刻な人道危機が後を絶たず、もはやどの国にいても理不尽な暴力にさらされる危険と無縁ではられません。こうした問題に対処すべく、国際社会は国連平和維持活動 (PKO) や平和構築支援などさまざまな国際平和協力政策を打ち出してきました。しかしいづれも予期した成果を挙げられていないばかりか、国際社会が実施する平和政策が現地社会に根づかず、組織的暴力が再燃したり、かえって激化する例も多く見られます。また国家間においても、歴史的、宗教的、思想的な相剋が相互理解を阻み、紛争の火種が尽きることはありません。その背景には、現在の平和構築方策の多くがアメリカをはじめとする西欧の学術的・理論的研究にのみ立脚した政策提言に基づき、西欧主導で進められてきた経緯があります。それらが行き詰まりを見せている今こそ、既存型とは一線を画した実証的・理論的な研究成果に裏打ちされた新たな平和創出への道が求められています。そうした中であって従来とは異なるアプローチを模索し、平和を自らの課題として引受ける主体として、わたくしたち日本を現場として暮らす人間に求められる役割は、ますます大きなものになっています。

こうした現状をふまえ、「オール立命館による学際統合型平和研究拠点」では、国際平和問題をめぐる専門家が数多く集結した立命館大学の強み

を生かし、平和創出の推進につながる研究拠点の構築を目指しています。「オール立命館」で学術横断的な研究を実施し、現行の平和協力政策の欠けを克服する新たなヴィジョンを提言したいと考えています。

**若手研究者を中心に矢内原忠雄の著作を精読・分析し
著名な植民政策学者の新たな側面を明らかにしました。**

「オール立命館による学際統合型平和研究拠点」の中で、本グループは、主に東北アジア地域に焦点を当て、歴史学、哲学、思想史、政治学、法学などの研究領域から相互理解と平和構築に資する研究を進めています。特長的なのは、「社会成熟研究」という新領域を開拓しようとしている点です。紛争解決・葛藤解消の前提として、関係諸国・地域の市民社会が成熟していることが重要であるという視点から、多様なアプローチで平和研究に寄与したいと考えています。

研究にあたっては、「市民社会・民主主義」、「歴史認識・相互理解」、「国際移動・人権保障」の3つの枠組みを設けています。「市民社会・民主主義」では、市民社会レベルで地域的な安全保障の可能性を問うことを目的とし、いまの市民社会がどのような状況にあり、共同を志向し得る意識や運動がどのように生まれる可能性があるかを理解しようとしています。また、各キャンパスの現場をフィールドとした日常的研究活動として、院生や学生の参画を意図して各分野の専門家を招聘、定期的に研究会を積み重ね、更

に隔週木曜日午前中にはキャンパスプラザにおいて市民向け学習会を継続していることも、堅実なステップになっているでしょう。

最近BKC若手研究者を中心に取り組んでいるのが、国際経済学者・植民政策学者として知られる矢内原忠雄の著作の精読・分析です。著書をつまびらかにしながら、矢内原のアジア観・人間観が形成されてきた過程を、可視化して見極めようとしています。盧溝橋事件直後に日本の中国侵略を批判する評論「国家の理想」を発表するなど、その反権力や平和思想について言及されることの多い矢内原ですが、分析を進めるうちに広くイメージされる矢内原像とは異なる「保守的」側面も明らかになってきました。「保守」が主張する平和の分析は、現在において特に重要なものになります。それらの洞察をいくつかの論文にまとめ、学会や研究会などで発表しています。

**立命館大学コリア研究センターを中核として
「歴史認識・相互理解」をテーマに研究会を開催しました。**

一方で、東アジアの安定的な国際関係の醸成において最大の障壁となっているのが、歴史認識の問題です。そこで「歴史認識・相互理解」を二つ目のテーマに据え、立命館大学コリア研究センター (RICKS) を中核として研究に取り組んでいます。長く相互「不理解」の状況が続いている東アジアにおける歴史的葛藤の現状を分析し、相互理解の基盤となる教育

インフラの構築を推進、東アジアひいては世界の歴史葛藤解消の一助となる成果を提示することを目指としています。具体的には、日本の戦争責任、植民地支配責任、「慰安婦」、強制連行、歴史教育などさまざまな問題群を取り上げ、その歴史と現状を分析、良質の研究会やシンポジウムを開催しています。

RICKSが主催する月例研究会やヘイトスピーチ研究会もその一つです。2014年10月のヘイトスピーチ特別研究会では、「ヘイトスピーチとレイシズムを問うー日本の社会と教育現場のあり方からー」をテーマに、ジャーナリストやRICKS研究員らが報告しました。「和解」は多極的に進められる必要があり、本年7月に南京において開催される戦後70周年記念の国際学会では、相互認識の当時からのズレについて、具体例を類型化した研究を報告します。

また大韓民国や朝鮮民主主義人民共和国・中国・台湾をはじめ、海外の研究者を招いた研究報告・総合討論会も数多く実施しています。2015年3月、「戦後70年、日韓基本条約50年にあたって」と題した国際シンポジウムでは、「日韓の『和解』のための歴史認識とは」をテーマにパネルディスカッションを行いました。こうした場で研究報告やコーディネーターなどの役割を担うことが、若手研究者の育成にもつながっています。

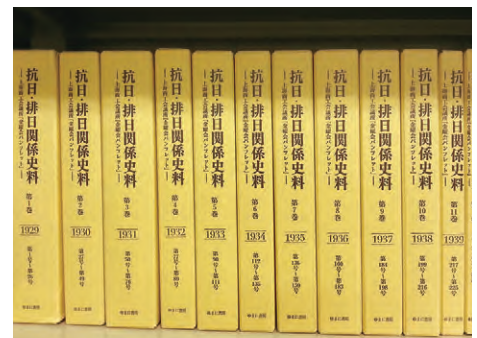
今後、「国際移動・人権保障」も含めた3つのチームそれぞれでさらに研究を進め、最終的には各チームの研究成果を融合して「社会成熟」と「平和構築」の主題に収斂、3キャンパス総合力を広く各界に提示します。



[写真 前列左中]
立命館大学経済学部 教授
金丸 裕一 グループリーダー



近隣の中学生・高校生と本学留学生で開催した合宿交流会



歴史問題解明の基礎作業としての史料集編纂の一成果

- 撮影協力者 [写真 前列左から]

村上 太輝夫 (朝日新聞論説委員国際社説担当)

金丸 裕一教授

岡 滋樹 (経済学研究科博士後期課程3回生)

伊澤 裕二 (経済学研究科博士前期課程3回生)
- [写真 中列左から]

鄭 玟 汀 (社会システム研究所客員研究員)

佐野 友紀 (経済学部学生3回生)

安井 日奈子 (経済学部学生2回生)

庄田 百花 (経済学部学生2回生)
- [写真 後列左から]

住友 胡桃 (経済学部学生2回生)

広岡 香月 (経済学部学生2回生)

細見 和弘 (社会システム研究所客員研究員)

武長 佑輔 (文学研究科博士前期課程2回生)

- 参考文献／1 「尖閣」問題をめぐる思索／祈り、福音と世界68-7、2013年

2 歴史学方法論與通往和解之路、立命館経済学61-5、2013年

3 近代中国と企業・文化・国家、ゆまに書房、2009年
- 連絡先／立命館大学 びわこ・くさつキャンパス 金丸 裕一研究室 電話：077-561-3337